
ドラゴンプラネット

級長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンプラネット

【Zコード】

Z7928Z

【作者名】

級長

【あらすじ】

プレイヤーがゲームの世界に入るという最新型ゲーム、ドラゴンプラネットオンライン。プレイヤー達の熱き戦いが今、始まる！メビウスリングで連載していた分に大幅な加筆修正を加えて転載。最新型ゲームを巡り、様々な思惑が錯綜する。

プロローグ

『私もつとせ、生きたかつたなあ……』

『渚！』

一人の少女が血を流して倒れている。胸から赤い液体がとめどなく溢れる。毎日のよう見ゆる、昔の夢。そして、いつもここで目が覚めるのだ。

「朝か。寝オチだなこりや」

俺はベッドから身体を起しす。布団に入ったはいいが、そのままゲームをして寝オチだ。いくら携帯ゲームのソフトだからって、一日でRPGをクリアすることないだろ？。これはナンセンスだ。

「こりや、次の実況に使えんな

俺は配信するゲーム実況動画の心配をした。もともとRPGは実況動画に向かないし、初見プレイでなければ面白みも薄いだろ？。しかもファイナルファンタジー？といえば誰もがお馴染みの名作、今更紹介動画も必要ないが。

「次はフリーゲームでホラー仕入れるか。そういう青鬼の新バージョン出てたつけ

動画の心配も早々に俺は支度を始める。これでも高校生なのだから、学校に行かねばならない。

そうなればこのさして広くない、机とベッドに本棚くらいしかない部屋から出なければ。俺は洗面台に行き、顔を洗つて年不相応に白くなつた髪の寝癖を直す。シリアルで軽く朝食を取つたらブレザーの制服に着替えて出掛けよう。眼鏡がなければほとんど何も見えないので、眼鏡は欠かせない。

俺はある事情により、ある刑事に育てられた。親の行方は依然として知れない。ただ、確かなのは弟がいるということだ。

「弟、か」

俺は玄関でローファーを履くと扉を開けて家を出る。俺が住んで

るのは自動車と味噌で有名な県、愛知。その愛知の味噌であるハ丁味噌を名物とする岡崎市のマンションだ。別に味噌臭くないぞ。

弟といつワードでつゝ思い出してしまつことがある。しかし、それをのんびり回想する暇はないよつだ。クラスメイトを通学路で拾わねば、あとで白髪を弄られる。

そんなわけで俺はそそくさと階段を降りてマンションを出る。俺の家は10階だが、エレベーターなど待てない。階段を高速で駆け降りる。エレベーターを使わないのは運動不足解消のためだ。ゲームは運動不足に陥り易いからな。

俺は樂々とマンションの一階まで降り立つ。昔から続けてるせいか息の一つ切れない。他にも最低限の筋トレはしている。

「あら遊人ちゃん。おはよっ」
「おはようござこます」

マンションから出た俺に声をかけたのは隣のおばさんだ。よくいる主婦みたいで、特徴がないのが特徴といえる。このおばさんは俺を小さい時から知っている。いまだ遊人ちゃん呼ばわりなのはそのせいが。ナンセンスナンセンス。

「最近どう? 高校とか」

「ええ、特に異常は見当たりません」「相変わらず回りくどい表現ねえ」

おや、回りくどい表現だったか今の? 普通に喋つたつもりだが。
「そういえばもうすぐね。渚ちゃんの命日」
「もうこんな時期か……」

渚というのは俺の恩人の名前だ。渚は弟に殺された。俺の弟だ。

「と、こんな話してると遅刻してまつ」
「いつてらつしゃい」

俺は話を切り上げて出掛けた。朝から湿っぽい話は無しだな。

俺の毎日はこんな感じで幕を開ける。岡崎市といつ町と共に目覚め、町と共に眠る。こんな毎日がただ続くだろうと、俺は思つてい
る。

ただ、今日の空は雲一つなく、UFOが出たらすぐわかりそうな感じだ。宇宙関係の出来事でもあるかもしれない。そんな気が薄々していた。

1・ログイン！

通学路 堤防

「へ？ 遊人、あのゲームやつてないの？」

そんな毎日の締めくくりたる夕暮れ時、愛知県内を流れる矢作川の堤防で、うちのクラスの副学級長、上杉夏恋が意外そうな声を上げた。

「やつてないもなにも、俺はオンラインゲームしないぞ」

この時間帯となると、帰宅部連中が堤防を通つて帰る様子がよく見える。この堤防は俺達が通う私立高校の通学路になつていて。俺は帰宅部ではないが、今日は動画を作るために帰る。部活の雰囲気も結構フリーダムだし。

「やつてると思ったのに、この廃人ゲームは」

「人をなんだと思ってる」

夏恋は毒のある言葉を吐き出す。客観的に見て、夏恋は普通に可愛いが、この点でかなり残念である。

「せつかくだからやってみなよ。このゲーム、通信費無料だし」

「怪しい。明らかに自分が騙された詐欺を紹介して道連れにしようとしてんだろ」

通信費無料という怪しさの隠し味を、俺は見逃さなかつた。なにしようとしてんだよこの毒キノコ。モバゲー等無料ゲームでも、パケット代などが別途でかかるのだ。

夏恋は長い黒髪をなびかせ、赤い携帯の画面を見せ付けた。赤つて明らかな毒キノコカラー。カエンタケみたい。

「その名も、【ドラゴンプラネットオンライン】！」

「！ おい、まさかそれ……」

俺は夏恋が自慢げに言ったゲームのタイトル、そして画面のロゴに見覚えがあった。これはたしか、ネットで噂になつた奴では？

「そうだよ白髪男！」「これは去年に発表された、世界初の全感覚投入ゲームなのだ！」

ドーン、という効果音でも付きそうな勢いで夏恋がいう。夏恋が地味に俺が幼少の頃に失った髪の色素について言つてきただ、完全に思い出した。

「ああ、思い出した。去年、世間を騒がせたあれか」「フルダ全感覚投入とは、ゲーム内にプレイヤーの意識を送り込む技術のことだ。

イメージされるのは、よく漫画とかである「ログアウト不能」とか「ゲームオーバー＝死」とか、そんなやつ。

「たしか、プレイヤーがアバターに入り込んで、まるで自分がアバター自身であるように操作できるとか」

まさに漫画の世界だ。言葉じゃ上手く説明出来ない。

「そうそう、そんなマイナスイメージばっかだから、政府が規制したりね」

夏恋は愚痴りながらイヤホンを俺に突き付けて言った。

「実際にやつた方がわかりやすいよ」

「なんだそのイヤホン」

俺には、何故夏恋がイヤホンを突き付けてきたかわからなかつた。ただのイヤホンだ。

「全感覚投入ってくらいだから、装置が必要でしょ？ だから、その装置、【ウエーブリーダー】」

「これが？」

夏恋は当たり前の様に言つたが、俺はこんなちつこい装置が全感覚投入なんていうオーバーテクノロジーを引き起こすものとは信じれない。

「私のお古。感謝しなさいよ？」

「お古とか……。これ、高いんじゃ……」

「1000円ポッキリ」

「安過ぎだ！ やっぱ嵌めようとしてんだろー！」

「聞こえていれば、君の生まれの不幸を呪うがいい」

「謀つたな、夏恋！ つてお前は仮面の三倍速か！ たしかに生

まれば不幸だけどさ！」

「あ、私ここから電車」

「待て赤い彗星！」

夏恋は駅に駆け込むと、ローカル線の赤い電車に乗つて戦闘領域を脱出した。

「…………」

俺は夏恋から渡されたイヤホンを手に、彗星の様に過ぎ去った彼女を見送つた。

数分後 某マンション

俺の自宅は学校から自転車で行ける距離の場所にあるマンション、その一室だ。
20階建ての内、10階という調度真ん中の階。俺はそこに里親と住んでいる。

「ただいま、つて誰もいないか」

俺の里親、直江愛花、姉ちゃんは愛知県警で刑事をしている。この時間、普段は家にいるがでかいヤマを抱えてると数日は帰れない。若いのに大変なこつた。まあ、実力があるから仕方ない。

案の定、でかいヤマらしくリビングの机に置き手紙がある。

『遊人へ。俺はちょっと厄介なヤマを抱えてるのでしばらく帰れない。帰つてくるまでに俺に勝てるよう、精進するのだな、フハハ

ハ』

「くそつ、一回勝つたからつて調子に乗りよつて！ 最強なのは俺のエールストライクだ！」

『俺』つて一人称は普通、アニメやゲームの主人公から移るか、友達から移るものだと人は言う。大抵の男子は親から『僕』つて人称を無理矢理定着させられるが、途中で『俺』に変わるとも言つ

た。

正直、俺の『俺』は母親代わりの姉ちゃんから移ったんだよ。置き手紙が置かれたのと同じ机には、台座で支えられた2台のロボットがあつた。まるで戦つてる様な『ディスプレイ』だが、そういう遊びなのだ。

「しかし、俺から提案してなんだが、プラモでこんな遊びしてんの俺らだけだよな……」

互いに見えない位置でプラモをポージングし、飾った時にどちらの攻撃が決まったかで勝敗を決する。昨日、俺と姉ちゃんはなかなか決着が着かず、最後は俺のエールストライクガンダム（主人公のロボ）が姉ちゃんのジン（量産機）のマシンガンで撃ち落とされた。

「趣味も姉ちゃんから移ったな……」

ゲームにプラモど、これも姉ちゃんの趣味。俺は両親でなく年の近い姉ちゃんに育てられたから、その分影響を受けたんだろう。

「複雑な家庭……」

それはさておき、俺は自分の部屋に向かう。複雑な家庭なのは承知の上だ。

部屋は姉ちゃんと整理してあるので綺麗だ。姉ちゃんの部屋など、とても足の踏み場はない。

机とベッド、ゲームが並べられた本棚にきちつと積まれた完成済みプラモの箱。そのくらいしか部屋にはない。

「さて、本題はこいつだ」

夏恋から貰ったイヤホン、【ウーブリーダー】。これで【ドランゴンブランネットオンライン】とやらができるらしい。

俺は部屋のノートパソコン（型落ち品。姉ちゃんからのお下がり）をインターネットにつなぎ、そのゲームについて情報を集めた。口イツはインターネットと動画編集に重きをおいてカスタマイズされている。その点だけなら最新型にも引けはとらん。

「まずは攻略ウィキだ」

俺は攻略ウィキを覗くことにした。案の定、ゲームの情報が沢山

だ。

集まつた情報を整理すると、そのゲームは名前をDPOと省略されることと、ゲームそのものは3年前に始まったことがわかった。さらに突き詰めると、DPO（早速使った）は全感覚投入というオーバーテクノロジーで問題となり、与党の渦海党がつい最近まで大々的な宣伝活動を禁じられていたり、無料で出来るのはインフレルノの資金力とゲーム内に看板を立てることで企業から貰える広告料のおかげだそうな。

アバターは男女逆転不能。脳波を読み取り性別を断定するからだ。ずっととゲームで女アバターを使つてゐる俺にはちとキツイ。

「ニコニコ動画にあるのか？」

俺は動画サイト、ニコニコ動画でプレイ動画を探した。やはり、ゲームの性質上プレイ動画はなかつた。代わりにゲーム内のカメラで撮影された動画があつた。見る限りPS3にも劣らない高画質だ。よいグラフィック。だが、肝心のプレイは見られない。

このニコニコ動画で俺は『ナイチンゲール』というハンドルネームを使い、ゲームを実況プレイする動画を投稿している。要は喋りながらゲームをプレイする動画だ。

「やはり俺の次なる実況動画を待つ声が……。ん？ メール？」そこまで調べたところで、俺の携帯が鳴り響いた。無料で取れる、電流を操る超能力を持つた少女が主人公のアニメのオープニングの着メロ。

「この着メロ、姉ちゃんか……」

姉ちゃんしか居ないが、家族のメールには着メロを変えている。メールにはこう書かれていた。

『面白いゲームの情報を拾つた。ドラゴンプラネットオンラインというらしい。ログインアプリが「コピーインストール出来るから、アプリを入れたSDカードを冷蔵庫に入れておいたよ。やつてみたら?』

「なぜ冷蔵庫に入れた！ そしてなにげに弟の背中を押すな！」

ＳＤカードを冷蔵庫に入れるという暴挙にでた姉ちゃんは見ての通りがさつだ。そのせいか、俺の家事スキルが上昇し続けている。姉ちゃんに任せると大惨事確定だからだ。特に料理。冷凍食品ぐらいいならなんとかなるが。

冷蔵庫までＳＤカードを取りに行き、携帯にカードを入れる。冷蔵庫の動くん棚の上に、ラップをかけた皿が。その皿にＳＤカード。

「もし変なゲームだつたら、姉ちゃんに責任転嫁だ」

仕方なく、部屋に戻りＳＤカードに入れられていたアプリでログイン開始。ウエーブリーダーを耳に付ける。

意を決して、ログイン。

「これでゲーム内に閉じ込められて、ＤＰＯ初の未帰還者になつたらどうしよう……」

俺のネガティブな発言は、世界が縦に一回転する感覚に打ち消された。

「で、これは？」

気がつくと、俺はプレイヤーのマイルームらしき部屋のベッドに寝かされていた。

妙に体が軽く、そして小さく感じられた。髪が長めのかわいらしさた髪が首筋や頬にかかる感覚がある。

まるで自分がアバターであるみたいだ。これが全感覚投入か。アバターにプレイヤーの意識をぶち込むのか。

田の前に青白く光るウインドウがあり、『ドラゴンブランネットオンライン』なんて書いてある。

『まずは鏡で、アバターをチェック！』なんてもついでに書いてあるので、言われた通り、広いだけで何もないワンルーム一人暮らし部屋にぽつんと置かれた大きな鏡に向かう。服屋にありそうな感じの奴だ。

「この部屋、ちょっとＳＦ風味だな」

窓の夜空は宇宙などではない。俺はログイン前の出身惑星選択で、バトルが楽しめると聞いただけで即、【暗黒惑星ネクロフィアダークネス】を選択したのだ。この惑星は一日中夜だそうだ。

「それより、アバターつと」

先程から、俺の声がハスキーというか女の子みたいな声だが、これが調べたところによる【ボイスエフェクト】なるものだろうか。アバターの外見とセットになつていて、ランダム生成されるアバターにあわせて選択されるとか。

体をよく見ると、それこそ女の子みたいに華奢だが、気にしそぎだろうか？ ログイン以上に意を決し、俺は鏡を見る。すると予想通りというかなんというか、

腰の下まで黒髪を伸ばし、赤い瞳をキョロキョロさせる、可憐な少女の姿があつた。

「んなつ…………！」

そんな馬鹿な！ 僕は叫びそうになる。しかし、絶句したままの口は叫び声を上げることを許さない。

これは何かの間違いだ。こいつは最近話題の男の娘キャラだ！ と、俺は自分に言い聞かせる。

服は初期設定なのか、ちょっと厚手のフード付き黒いワンピース。赤の装飾がカラー・バランス的にピッタリかわいらしい。

ワンピ、つまり、ズボンなどはいてはない。

精神的ダメージを増加させつつ、俺は決定的確認に移り、ある場所に触れる決意をする。

つまり胸とか。

「うげ……」

確信した、このアバターは女だ！ なんかリアルの俺にない感触

がある！ 見た目まな板だから気付かなかつた。

夏恋が休み時間にこつそり言つてたし、俺も攻略ウィキで確認したからこそ、この現象が信じがたい。

『異性のアバターの使用は、脳に深刻な影響を残すと熱地学院大学の調査で判明した。そのため法律で禁じられてる』、『故に、DPOでは脳波によつて男女を見分け、アバターを生成する』

一時間程度に渡つて調べたサイトの情報には、軒並みそんな情報があつた。公式サイトも例外ではない。ログイン前に確認したさ、何度も。女アバター使えないのはちとキツイと思いながらな！ 逆にこんな情報もあつた、気がする。

『脳波の違いで男女を見分けるシステムだが、開発者の大川緋色氏は「多分、性別逆転事故とかあるかもね。 多分だけどね（笑）」と言つている』

「開発者出てこい！ 前に出ろ、前だ！ ミンチよりひでえや！」 こうして、俺はこの少女のアバターを外見から『墨炎』と名付け、恐らくであるが【ドラゴンプラネットオンライン】初の性別逆転プレイヤーとなつたのだ。

2・チユートリアル（前書き）

プロフ

直江遊人

所属 私立長篠高等学校

血液型 A型 Rh -

誕生日 2月14日（水瓶座）

出身中学 市立関ヶ原中学校

趣味 ゲーム、プラモ作り

特技 料理（特にイタリアン）、チーズを味で見分ける

得意料理 パスタ、ピザ

好物 乳製品

得意科目 家庭科

苦手科目 体育

嫌いな物 日光（色素が薄いので夏場は肌の露出厳禁。夏でも冬服を着る許可がある）

特徴 白髪（白毛登録済み）

2・チュートリアル

翌日 矢作橋駅前

「嘘だと言つてよバーニー……」

翌日のことだ。今だ性別逆転のショックから立ち直れない俺は学校に行くため、夏恋と別れた矢作橋駅前を通りかかった。俺はある後、逃げる様にログアウトしてガンダムVS（格闘ゲーム）をしていた。バーニーのザクでガンダムをフルボッコである。

「ヤツホー白髪廃人アンド眼鏡。アバター作つた？」

「赤い携帯？ 夏恋か？ 毒キノコの夏恋か？」

「誰が毒キノコだ」

すると案の定、夏恋がいた。登校の時間帯なので同じ制服の人間がたくさんいる。まるで無双かバサラの雑魚キャラみたいだ。

「遊人は女の子にそんなことばかり言つから、神様が罰として白髪にしたんだよ」

夏恋は不機嫌そうに頬つぺたを膨らませる。学校のブレザーを纏つた姿は見目麗しいが、いくら麗しかろうが毒は毒。食べるな危険。

「あー。お前、マジで俺が【ドラゴンプラネットオンライン】始めたこと先輩に行つたのか？」

「そうだけど？ もしかしてアバター気に入らない？ ランダム生成だもんね」

夏恋はなんと、俺がアバターを作つたと聞いたら漫画研究部の先輩方に言つたのだ。

てか、アバターってランダム生成なのか。どおりで何もメイキング画面が出てこないわけだ。反転の衝撃でスルーしていた。

おかげで今日の部活は俺のアバターお披露目となりそうだ。あの美少女アバターを。

インターネット機能があれば携帯だらうと PSPだらうとログイ

ン出来てしまつ」のゲームの便利さを、俺は恨んだ。

ゲーム研究部 部室

部活の時間。俺はこれだけを楽しみに私立長篠高校に入ったのに、今日は部活は憂鬱だ。ゲーム研究部は元々、テーブルゲームの研究を中心に活動していたが、時代の流れと共にテレビゲームが主体となつた。文化祭ではオリジナルのゲームも公開する。

というか、部活の人間ほぼ全てが【ドラゴンプラネットオンライン】ユーザーとは、

「神の悪戯だ……。不幸だ」

俺は歴史ある部、漫画研究部のちよつと広い部室の戸を開ける。

「お、白髪の目立つ遊人が来た」

「気にしてなかつたけど言われると」

部室には部長（男子）と夏恋しか居なかつた。部長と夏恋はいきなり、俺の白髪ぶりを指摘しやがる。

これが中学の頃より酷く、白い。

「さて、早速アバターのお披露目だ！ オレのアバターより格好悪いよな？」

「私、ショタ希望」

一年生や残りの一年生はいざこ、という俺の疑問を無視し、部長はと夏恋が俺のアバターに期待（？）する。その期待は残念ながらハズレだらう。

この部の構成は三年生一人に二年生数人（幽霊部員が多いから正確な人数はわからない）、一年生は俺を含め五人だ。

「くそつ、なにが悲しゅうて4月の部活に慣れてない時期に怪しいゲームを部室でしてんだが」

俺は悪態を付きながら、夏恋から貰つた専用のイヤホンを携帯と耳につけ、【ドラゴンプラネットオンライン ログインアプリ】を起動する。

「うわ、これ慣れん」

すると、世界が一周回転する様な感覚に見舞われ、俺の意識は途切れだ。

全感覚投入つて危険だ。椅子に座つてたからいいものを、立つていたら倒れていた。

マイルーム

前にも説明したがプレイヤーは4つある惑星から出身惑星を選べる。その一つ、【ネクロフィアダークネス】が俺の出身惑星だ。初期設定感たっぷりな自室のベッドで俺は目を覚ました。このゲームは必ず、自室【マイルーム】から始まるようだ。

「やっぱ参ったな、全感覚投入。これじゃ俺自身がアバターみたいだ」

俺はガキの頃【·h a c k】みたいにゲームの中に入れたらと願つたこともある。しかし、願いというものは残酷で、叶つたらかなり興ざめだ。つか、ボタン操作を極めた俺にとってWinだのキネクトだのそれ以外の操作は天敵だ。操作が現実の身体と同じなんて尚更だ。

「あれ？ 遊人どこ？」

「奴の部屋に来たんだ。必ずここにいる」

二人の聞き覚えある声が聞こえる。このゲームはアバターの声が決まつたら、自分でしゃべる時もその声でしゃべることになる。ボイスエフェクトという奴だ。しかし、この二人の様にボイスエフェクトは切れる。

「お、いたい……た？」

「ま……さか」

二人のアバターが部屋の隅で絶句していた。部長と夏恋には、事前にメールで俺の【マイルーム】への【トランスポーター・バス】を渡してある。これで二人は俺の【マイルーム】へ直行出来る。

黒いロングコートのアバターが部長のアバター。名前はジヨーカー。赤い可憐なドレスの少女アバターが夏恋のアバター、カレンだ。本名をまんま名前に使つてるようだ。

当然、性別の反転は出来ない。アカウントを作ると、システムがプレイヤーの脳波を読み取つて性別を判断し、アバターを自動生成するからだ。『普通』ならな。

「遊人？ 人違い？」

「転送ミスか？」

「たしかに、俺だ。遊人だ」

夏恋改めてカレンのこの慌てよう、当然だ。

俺は初期設定で部屋におかれてる鏡を覗き込んだ。

そこには腰の下まで伸びた黒髪をなびかせ、赤い瞳を照れ臭そうにキヨロキヨロさせる少女の姿があつた。

大事なことだから一回目だぞ！

「男の娘アバター？ 聞いたことない！」

ジヨーカーが必要以上に取り乱す。部長の慌てる姿を見るのは始めてだ。

「失礼！ 確認をば！」

「うひゃあ！ 何すんの！」

カレンは俺の後ろに回り込み、いろいろまさぐつた。

例えば、胸とか。

「うわあ！ こいつ女の子だよ！」

「ああそうですよ！ 恐怖の性別逆転事故ですわ！」

いつもの罵声をかわいらしいボイスエフェクトで言つても迫力皆無。カレンの『確認』はエスカレートする。

「そこは触るなあ！」

「なんだコイツ。やけに感度高いぞ。小さいほど感じやすいってのは本当だったのね」

「あつ、ダメ……くすぐつたい……」

「これがええんのか！」

「ひうつ！ そこは……あ」

「凄い演技力。遊人……。恐ろしい子……」

「これは……、演技じや、ない……」

いろいろ弄られ、意識が遠退きかけた俺は、性別逆転の恐ろしさを体感する以外になかった。

数分後 ネクロファイアダークネス 墜ちる事なき天下人の居住

「やつて来ました戦闘フィールド！」

「待て、俺のアバターの問題は無視か！」

夏恋改めることなくカレンがネクロファイアダークネスの戦闘フィールドで元気にはしゃぐ中、俺の性別逆転事故は無視されていた。一緒にいる部長改めジョーカーも同じく無視を決めこんだ。

「まずはこの悲惨な事故をインフェルノに伝えるべき！」

「そのアバター、破棄するの？ もつたいない」

「変な理由で俺の脳に深刻な影響を生むな！」

現在地はネクロファイアダークネスの戦闘フィールド、【墜ちる事なき天下人の居住】。なんかワープ装置らしきものの端末でカレンがピコピコやつたら、ここに転送された。

「まず、自分の視界左隅をご確認下さい。そこにある緑のバーがHPゲージです」

「これが」

俺はカレンの言つ通り、視界左隅の手頃な距離に浮かんでるHPゲージを確認した。ゲージの上には【墨炎】とアバターの名前がつた。ナイチンゲールといつものハンドルネーム使用も考えたが、どうせ後で破棄するアバターだ。適当でいいや。

「そして、私とジョーカー部長の頭上に青いゲージがあるはず。これがパーティーメンバーのHPゲージ。私と遊人、ジョーカー部

長は同じパーティーにいるの」

「パーティーは最大4人だ」

フムフム、成る程。さすがにキャリアが違うな、夏恋。

基本を学んだので、フィールドを見渡す。【墜ちる事なき天下人の居住】とやらはネクロファイアダークネスにあり、夜空が荒廃した町の上に広がる。どこかで見覚えがあると思ったらこれは岡崎城じゃないか。岡崎城はあの徳川家康が生まれた場所だ。このフィールドは実際の名所を元に作られているのか。

その時、影が地面から這い出した。

「なんだ？ 敵か？」

「シャドウ、ネクロファイアダークネスの基本的なモンスターね」シャドウとカレンが呼んだそいつは、人の形をした影そのものの姿をしている。

「武器を取つて！ 戦うよ！」

カレンが腰の剣帯からレイピアを抜く。ジョーカーは拳での戦闘らしく、手にグローブをはめてる。

「ていうか、数が多い……」

シャドウは凄まじい数群れを成して俺達に襲いかかってきた。俺も武器を抜く。腰のベルトの左右に取り付けた鞘から、二本の片手剣を抜いて、双剣スタイルになる。この剣は始めにマイルームの倉庫に入れられていたものだ。【ロングソード】という初期臭全開な剣だ。

「双剣？ 難しいよ、それ」

「始めは片手剣だけだったけど、なんか左手が空いてるのが気になつてな」

「お手々が空いてるなら、手を繋いであげたのに」「お断りする！」

カレンの軽口をあしらいながら、俺はシャドウに向き直る。

「さて、まず技を使ってみよう」

「技って、ボタンも無しにどうやって？」

カレンはシャドウの一匹にレイピアを向け、突きを放った。

「【レイジ】」

レイピアは青いエフェクトを放つて、シャドウに突き刺さる。シャドウは倒れた。シャドウは青いポリゴンになつて爆散する。

「今のが？」

「今のが【技】。プレイヤーが最初の動きを行つと、後はシステムが体を動かしてくれるの。技の名前を口にすると効果的。スキルがあるなら始めから一つは技を使えるはず」

そうか、と俺は頷き、シャドウに右手の剣を向けた。戦闘前にスキルというのを確認しておいた。確認作業は大事だな。

「【ライジングスラッシュ】！」

発動したのは【片手剣術】の基本技、【ライジングスラッシュ】。単なる水平斬りだが、攻撃力補正が高い。【片手剣術】は片手剣、つまり俺が使つてるロングソードの様な武器を装備するだけで手に入るスキルだ。二刀流するにも特別なスキルは必要なく、左にも剣を装備すると【双剣術】スキルが手に入る。

剣が青いエフェクトを放ち、シャドウを薙ぎ倒す。何匹かまとめて屠つた。

「さて、ネクロファイアダークネスの戦闘は緩くない。まさに無双だ」

ジョーカー部長は技名を言わずにシャドウを技で殴り飛ばした。慣れるとあんなことも出来るのか。

アバターのお披露目だったはずが、いつの間にか協力プレイ。ひとまず、ボタン操作とまったく違う全感覚投入のバトル感覚は慣れるまで時間がかかりそuddoと俺は思った。

数十分後 部室

「全く、本当何が悲しゅうてこんなゲームしてんだか」

一旦の練習を終え、俺と夏恋、ジョーカー部長は現実に帰つて来

た。

「ホント、何が悲しゅうて……」

「誘つた本人が言うな！」

ひとまず、俺は時計で時間を確認した。向こうには1時間ほどいたはずだが、こっちでは10分しかたつてない。5倍の時間が向こうで経っているというのか。

「意識の引き延ばしによる時間の延長、だっけか」

「このゲーム、オーバーテクノロジーの塊だからね」

俺と夏恋は話しながら、部長の方を見た。しかし時間の引き延ばしなどしたら、向こうの世界での待ち合わせは大変そうだ。1分口グインが遅れればそれは5分相手を待たせることになる。プレイヤーはリアル以上に時間厳守を求められる。

部長は新聞なんぞ読んでる。部室には新聞が積まれてるのだ。

「今日は【サイバーガールズ】の記事はないか……」

「残念そうですね」

「便りがないのは無事な知らせさ」

まあ、部長は【サイバーガールズ】なるアイドルグループのファンだ。ゲーマーによるアイドルグループで、俺も一時期興味を持つたが大したゲーマー性でなかつたため放れたのだ。デビルメイクライの最高難易度DMDモード出す前にへばるとか、本番はDMDモード出てからなのに。

「おしメンは赤野鞠子さんだ」

「聞いてません」

「実は14歳らしい」

「とんだ労働基準法違反？」

「ぎりぎりだ」

「ぎりぎりじゃん！」

しかし、さつきから夏恋が会話に入らないことが気掛かりだ。
俺は夏恋の方を見た。

「ぐー……」

「おい」

寝てやがる、立つたまま。弁慶の立ち往生か。弁慶夏恋、否、武蔵坊夏恋か。

「寝たら死ぬぞ」

「はつ！ しまった！ なんか最近、寝ても疲れがとれなくて」

「そういや、授業中もぐーすか寝てるしな」

「いつの場合、寝てるかどうか怪しい。ずっとB級的な妄想膨らまして夜が明けるタイプの人間だ。昨日なんか、クラスメイトを【攻め】と【受け】に分けてたし。

「そういうえば、遊人って攻めだよね」

「黙れ妄想女！」

「ふふふ、腐女子の妄想に限界は無いのだよ遊人くん。その気になれば床と天井でB級できる」

夏恋は筋金入りの腐女子。言つて止まるやつじゃない。俺はあらゆることを諦めた。

「しかし、最近の若いやつは凄いぞ。鞠子さんの記事と同じページだが、この松永順つて奴はお前らと同じ年なのにノーベル賞候補だし」

「はいはい、新聞はシュレッダー」

「ぎゃー！ 鞠子さんの記事のページだけ丁寧に…」

部長が全力でうなだれた。本気で可哀相だが、こうでもしないと部長は止まらない。

「さて、俺は帰りますよ。なんか萎えました」

「遊人め……。お百度参りで呪つてやる……」

「お百度参りは呪いじやありませんよ」

俺は部長と夏恋を残して部室を後にしたのだった。

「しかし、びびった」

@

帰り道、堤防沿いの道で俺は呟いた。

アバターが女の子だつたことではない。新聞のことだ。
松永順は実は俺の双子の弟だ。いろいろ因縁があつて、苗字も違うし見た目も似てない。

新聞をシュレッダーしたのはそのためもある。

「ていうか、ノーベル賞か」

弟はハツキリいうと自他共に認める天才だ。だけど、あいつは俺から大事なものを奪つた。

「あれ？ そこにいるのは直江ちゃんですか？」

突然、やたらに幼い声がかけられる。

「せ、先生……」

声をかけてきたのは中学時代の担任、立花凜歌先生。

「また一層白くなつたですか？」

ぱつと見、この人の方が生徒なんじゃないかと思うほど若い。実際、年齢的にも若く現在教員歴4年だ。どこぞの学園都市のミニ教師ほどでないのが救いだ。

「そういう先生こそ、縮みました？」

「なつ！ そ、そんなことないです！ 毎日牛乳を1リットル飲んで、ちゃんと伸びて146cmです」

「カルシウムとるにはCBPが大事らしいですよ？」

しかし、なんてカルシウム吸収効率の悪い人だろうか。そのうち、カルシウム取つても骨すかすかの怪奇現象とかでテレビに出そうだ。

「そういえば、弟さん。ノーベル賞候補だそうですね」

「ああ、まあ。死ねばいいのに」

「因縁深いですね。たしか生物学の分野ですから、えっと、内部被曝に効く薬の取つ掛けりを作つたとか」

凜歌先生は俺の過去を知る数少ない人だ。順という【善良な天才少年】の過去も、同時に。

「くそつ。渚を殺して悠々と生きやがって！」

「復讐に生きても何にもならないというのは、戯語に聞こえます

ね」

松永順。「イツは俺の弟であると同時に俺史上最悪の人間だ。」「イツは自らの地位安定の為、渚を殺してのうのうと生きてる。

凛歌先生は順が俺のクラスメイトを利用しようとした事件に巻き込まれ、それを知ってる。

「何がなんでも、あいつだけはこの手で……」

殺す、とまでは言わなかつた。しかし、先生には伝わつた。

「私は直江ちゃんに、人殺しになつて欲しくないのです。昔と違つて、直江ちゃんがいなくて悲しむ人はたくさんいるのです」

先生はそう言つ。だが、順とはどんな形であれ、ケリをつける。

矢作川に沈む夕日が、俺の決意を照らした。

「そういえば、先生は九州の出身でしたな」

「そうですよ？ 愛知県は数学に力を入れてるそうで、私は数学専門なので興味が出ました」

暗い話題になつたので、明るい話題にしてみた。

「数学ねえ。おかげでこちらは余分な問題集渡されましたけどね」

「数学の友ですね。暇つぶしのおやつがわりには調度いいですが、

苦手な子には厳しいですね、あれは」

愛知県は数学に力を入れていて、愛知県在住の中学生には数学の友なる問題集が配布される。あんな友達、絶交したいね、俺は。

凛歌先生は数学が好きだが、苦手な生徒の気持ちがわかる人だ。教師として、かなり立派なタイプ。

それから俺は先生と雑談して別れた。一人、自宅へ向かう。

夏が近いだけに、まだ日は出てるが暗いものは暗い。大通りとはいえ、不審者に気をつけよう。

最近は切り裂き魔とやらも出ることだし。

2・チユートリアル（後書き）

謝罪

文章に誤りがあつたため謝ります。誰がうまいこと言えと（「y
夏恋だカレンだリーザだ、作者が混乱しました。メビウスリング
時代の名前をカレンに修正仕切れませんでした。もう修正したの
で大丈夫です。

お詫びのアイテムです。オンラインゲーム（と言つてもモバゲーだ
が）にはお約束ですね。
つ 回復薬 × 10

視界ジャックその1 保護者と被復讐者（前書き）

ドラゴンプラネットとは？

ドラゴンプラネットとは、最新型のシステムを利用したオンラインゲームである。

プレイヤーは『自然惑星ネイチャーフォートレス』、『機械惑星ギアテイクメカニクル』、『水没惑星アトランティックオーシャン』いずれかの住民となり、突如現れた巨大な惑星、『ドラゴンプラネット』から侵略を狙うドラゴン達に立ち向かうのだ！

（『暗黒惑星ネクロフィアダーケネス』は一周年記念に実装されたもの）

視界ジャックその1 保護者と被復讐者

愛知県警 『連續無差別切り裂き魔事件』 捜査本部

「でさ、ガイシャの話は？」

「傷は命に別状ないですが、恐怖のあまり記憶が定かじやないそ
うです」

物々しい雰囲気に包まれる捜査本部。その中に彼女の姿はあつた。
直江愛花、遊人の育ての親だ。

年齢的に親子というほど放れてなく、愛花は遊人と姉弟みたいな
関係を築いている。

長い髪をポニーtailに結つた若い女性。美人の類いに入る整つ
た顔立ちとプロポーションだが、いかんせん勝ち氣で男勝りなので
近寄り難い。

「あー。犯人殴つて事件解決せんかなー。俺はちまちました捜査
よりガサ入れでドンパチやんのが性にあつてんのよ」

「愛花さん、警察は軍隊じゃありません」

「そういうちまちましたことが得意な人が言つと説得力あります
ん」

舍弟同然に連れてくる部下一人からツツ「コミを入れられ、手にとつ
た資料に目を通す愛花。彼女はサッパリして面倒見のよい性格ゆえ、
慕う後輩や部下が多い。

「なに? 今度のガイシャは遊人のクラスメイト? 行くぞお前
ら、事情聴取だ」

「私情挟みすぎ」

愛花は被害者の名前を確認し、とつと本部を出て行ってしまう。
男前な言動に確かな捜査技術、直江愛花が他の刑事たちから慕わ
れる理由はこれだ。上司も実績を知るから、多少なり彼女が私情を
挟もうがなにも言わない。

市民病院前

時間的には遊人が恐怖の性別逆転事故の結末を部員に語った日の夜、切り裂き魔事件に新たな被害者が出た。

名前はこの場では伏せておく。

「全く、マスコミは蟲だよ。人の不幸に蠅の様にたかる」

愛花の周りに何かの機械の部品やコードが散らばっている。愛花は警棒をパシパシと手で持て余しながら、マスコミを批判した。

被害者の精神に悪影響を及ぼすため、マスコミには取材を自粛させてる。しかしホットな話題だけに報道は加熱、結果として愛花がマスコミを『肅正』することとなつた。

警察と名乗つてないし、目撃者=被害者みたいな状況で中継カメラを最優先で破壊したのが幸いし、とくに問題にはならなかつた。

マスコミは報道の自由を盾に好き勝手やるからな、愛花は呟いた。彼女自身、幼少の頃は過激な報道の被害者であつた経験がある。親友が冤罪で捕まり、間違つたままマスコミが犯人として報道した。間違いがわかつた後もマスコミは修正や謝罪をせず、親友を自殺に追い込んだ。

「愛ちゃん愛ちゃん、被害者の子はショックで記憶が定かじやないのよ」

「聞いた、だからマスコミを無双乱舞で叩きのめしたんじやん」

病院から騒ぎを聞き付けた癪野が出てくる。愛花と同い年くらいの彼女は、司法解剖を担当する解剖医にして被害者のケアを行う力

ウンセラーである。

「マスコミって過激。愛ちゃんもだけど。最近、マスコミは今回の事件、DPOプレイヤーが全感覚投入の影響で現実とゲームの区別がつかなくなつての犯行とか言つてるし」

「マスコミは話盛ることにかけては一流だからね。この切り裂き魔事件は、DPOが大々的に広告される前からちゅくちゅく方向さ

れている

愛花にDPOの情報を流し、結果的に遊人のログインを後押ししたのは癒野だ。愛ちゃんと呼ぶあたり、親しいらしい。

「療子、俺は実はホシの日星が付いてるんだ。ホシだけに」

「さすが破天荒刑事独走派。教えて」

癒野の下の名前は療子というらしい。愛花は自分の推測を口にする。

「この事件、実は九州でも昔、確認されてる。私が遊人を引き取った時期だな。そして、犯人は九州の時と同じ。皮肉なことに、犯人は遊人と関わりがある」

愛花は言った、犯人の名前を。

「××……、××

東京都新宿区 とあるマンション

「このゲームにマイナスな印象を与えるために、論文かけとか。まったく、大人はこれだから嫌いだね」

新宿区にあるマンションの一室。そのソファで一人の少年が封筒から書類を出して言った。封筒には熱地学院大学と書かれている。

「順の家つて、最高裁判官の家系よね？ なんで科学者してるの？」

傍らに座る金髪の少女が順と呼ばれた少年に寄り掛かりながら言った。

「適材適所さ。松永家人間だからといって、全員裁判官に向いてるわけではない」

「そう」

少年の名前は松永順。遊人の弟だ。双子であり、顔立ちが非常に似ている。だが、髪は黒く、顔立ちも多少幼く見える。

「で、仕事はどうするの？ あの熱地学院大学だし……」

「するさ。学会を牛耳る熱地学院大学にコネを作るチャンスだ」

順は書類をめくる。

「何故大人はゲームを忌避するのだろうね」

遊人が生きる意味、復讐の相手は物思いに耽つた。金髪の少女は眼鏡をかけて順を見つめる。

「で、コネを売つてどうするの?」

「どうするって、決まってるさ。目的を果たすんだ」

順は見つめ返して答える。少女は順に倒れ込む。順も少女を抱きしめた。別に恋人同士ではないが、幼なじみなので男女を越えた関係を気づいている。故に、抱き合つたりキスしたりなどは彼らにとって日常茶飯事だ。

「ただ、問題は兄さんかな……」

順は少女が振り撒く太陽の香りを嗅ぎながら、別れた兄を思い出した。

視界ジャックその1 保護者と被復讐者（後書き）

お詫び

『2・チュー・トリアル』にて、なんかややこしい事態になつてたことをお詫びします。もつ修正しました。

リーザつてのは夏恋のアバターの名前で、メビウスリングから転載する際にカレンに変更したのを、修正が不十分で読者の混乱を招いてしましました。

番外 大晦日だよ要点集合（前書き）

プロフ
直江愛花
所属 愛知県警
血液型 B型 Rh +
誕生日 5月5日（31歳）
母校 私立長篠高等学校
趣味 スポーツ全般
特技 軍隊式サバット
好物 辛い食べ物、酒類
男性のタイプ 紳士的な人

番外 大晦日だよ要点集合

カラオケボックス

「大晦日だぜ」

「要点集合！」

大晦日の晩下がり、遊人は里親の愛花とカラオケボックスにいた。今回は単純に歌えば済むって話ではなさそうだ。遊人の低いテンションと裏腹に愛花はやたらハイテンションだ。

「今日は級長つてヤローから、『ドラゴンプラネット』の要点まとめとけつて言われてんだよ」

「なるほど、モニターもあるし防音のできるカラオケボックスは機密情報の公開にもつてこいだな」

愛花が言うにはここで連載中の小説、『ドラゴンプラネット』の要点をまとめるようだ。遊人の言う様に機密情報の公開にカラオケボックスが向いてるかは不明だが。

「まず、これを見てくれ。物語の鍵、切り裂き魔事件だ」

愛花がリモコンで画面に文字を表示する。切り裂き魔事件と血文字で書かれている。

「切り裂き魔事件？」

「愛知県警管轄内で発生した連続無差別傷害事件だ。俺も捜査に参加している。犯人はナイフで被害者に傷を負わせてるも、幸い死者はないねえ」

画面には事件発生箇所を示した地図が映る。発生箇所は美合駅周辺。矢作橋駅から乗つて行ける駅だ。

「あれ？ この駅つて夏恋が降りるところじゃね？ 通学は美合で乗つて矢作橋で降りるつて……」

「なら彼女に注意でも促しちゃな」

愛花は画面を切り替える。次に映るのはタイトルロゴ。言わずも

がな、ドラゴンプラネットオンラインのものだ。

「これが物語の鍵その2、ドラゴンプラネットオンライン。遊人、お前の戦いの舞台だ」

「まあ、アバターはあれだがな……」
画面がまたも切り替わり、墨炎の姿が映る。これが遊人のアバタード。

「あれねえ……」

「なつ！ いつ撮つた！」

遊人は珍しく狼狽した。アバター、墨炎は双剣で戦う剣士アバター。このゲームでは体格が小さいと当たり判定が少ない代わりに吹き飛ばされやすくなる。墨炎は攻撃を確実に回避する必要のあるアバターだ。

「四つあるスキルスロットの内一つにセットした『片手剣術』と『双剣術』はボイスコマンドで技が発動出来る。片手剣術は左右それぞれで発動が出来る」

「アクティブなスタイルをやってきた遊人らしいよな」

「残り一つは『索敵』と『ステップ』。索敵は敵を発見するスクリューステップはフットワークにシステムのサポートに入る。どれも剣士には欠かせないスキルだ」

遊人が説明し終えると画面が変わる。画面には一人の少年が映されている。

「物語の鍵その3、松永順。彼が何なのかは、そのうち語られるだろうな。物語の鍵その4、渚も同様だ」

愛花が言い終わると唐突に歌が始まる。サイバーガールズの『恋の協力プレイ』である。

「これが物語の鍵その5、サイバーガールズ。こりや今の俺には関係ないが……。まあ、注目するにこしたことはないな」

遊人はいくつかサイバーガールズのブロマイドを取り出した。二人には恐らく、全員同じに見えるだろう。

「ついわけで、今年も数時間ないわけだし。来年は辰年なんでド

「パソコンネットをよろしくな！」

「主人公よりテンション高いな、姉ちゃん」

もうすぐ今年も終わり。来年の正月は寝正月ではなくゲーム正月

にしてみては？

番外 大晦日だよ要点集合（後書き）

今年ももうすぐ終わりですね。

前の『2・チユートリアル』にて、カレンだリーザだややこしいことになつていまつたが、もう修正しました。修正後のあとがきにも書きましたが改めてここでも。

さて、来年もよろしくお願ひします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7928z/>

ドラゴンプラネット

2011年12月31日22時52分発行